

Passion

北海道師範塾では、11月から、来年の教員採用を目指している学生や期限付き教員を対象とする「教師への道講座」を開設しています。この講座は、教師としての志と実践力の双方を兼ね備えた、バランスの取れた人材を一人でも多く教育現場に送り込みたいとの意図の下に開設したもので、既に4回（16講座）実施してきました。受講生の様子を見ていますと、回を重ねるごとに熱気が高まってきているように感じています。

受講生の皆さんは、目指している校種や教科だけでなく、既に学校で期限付きながら教師として活動している方、これから採用試験にチャレンジしようとしている学生といったように様々ですが、彼らに共通しているのは、「どうしても教師になるぞ！」という情熱（Passion）とあって良いでしょう。特に、期限付き教師として働いている皆さんにとって、日々の教育実践と受験勉強との両立には厳しいものがあると思いますが、それを支えているのは、子ども達のために実践力のある教師になりたいという、熱い思いに違いありません。

今年の採用試験の結果を見ると、競争倍率は校種や教科によって当然異なりますが、全体では5.1倍ということですから、これまでと比較すると若干下がっています。とはいえ、教師としての切符を手に入れることは容易ではなく、依然として狭き門であることに変わりありません。

しかし、この狭き門を潜らない限り、教師への道へは進むことができません。既に何度か採用試験にチャレンジして、その都度はね返されている人にとっては、その門は余りにも狭く、その壁は余りにも高いと感じていることでしょう。それは試練といっても良く、その試練は、耐えるのではなく乗り越えなければ目的を達することができません。そして、乗り越えるためには、乗り越えようという意志と情熱（Passion）が不可欠なのです。

この情熱（Passion）は、キリストの受難（Passion）と同じ語源を持っていますが、それは何故だとお考えになりますか。

キリストにとって、十字架に架けられ殺されるということは受難以外の何ものでもありませんが、それは神の意志であり、キリストもまた、神の意志に従

順だったということだと思います。ただ私は、たとえ神の意志とはいえ、罪なき人が人々に嘲られ、十字架を背負いながら刑場に送られる姿は、誠に悲劇的であり、「生け贄」という言葉の方が相応しいようにさえ思っていました。

しかし、最近、キリストの受難にはキリスト自身の意志が働いていたのではなかったかと感じるようになりました。

今では、キリストが十字架に架けられて死ぬということは、神が描いた設計図かも知れませんが、実は、キリスト自らが、強い意志でその設計図をなぞって行ったのではないかと考えています。そして、彼をしてそうさせたのは、人々への愛情と人々を救いたいという熱い心（Passion）だったように思うのです。

クリスチャンでもない私が、このように考えることは、理解が十分ではない、あるいは正しくないかも知れません。ただ、私は、キリストの受難と情熱との関係を探る中で、「教師への道講座」を受講している皆さんには、試練があるからこそ、その試練を乗り越えようとするところに情熱が生まれ、情熱があればこそ、試練を乗り越えようとする力が湧いてくるのではないか、ということをしり上げたいと思っています。

脳科学者の茂木健一郎氏は「情熱は受難によってこそ貫かれているのだ。」と述べています（同氏著「思考の補助線」）。我々は、与えられた試練に背を向けてはならない、ということなのではないでしょうか。（塾頭 吉田 洋一）